

# 岡島緑郎最強伝説

シャト6

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

岡島緑郎になってBlack Lagoonの世界で生きていく転生者のお話

作者が調べられるだけのおじさんく老人最強キャラの能力を授かっています。なので。話の中で岡島が物凄く強くロアナプラーになる場合もあり、作品崩壊もあります。

それでもいい方は読んでいただけると幸いです。

目次

第4話  
第3話  
第2話  
第1話

21  
15  
8  
1

## 第1話

「うくん……ここは？」

目が覚めると、真っ白で広い場所だった。

「…何処(どこ)？」

「気が付いた様だな」

声が出たので振り返ると、男が立っていた。

「えつと…何方？」

「君の世界では神と呼ばれていた」

「神…えっ？」

その言葉に、流石に男は驚く。

「驚くのは当然だな」

「まあ…ところで、何で俺はこんな場所に？」

「その事だが、実は…」

言葉を止めてるので、男も自然に緊張する。

「私のミスで、君を殺してしまったのだよ」

「…はっ？」

信じられない言葉を聞き、男はこう聞き返した。

「あの、もう一度言ってもらっていいですか？」

「だから、間違つて君を殺してしまったのだよ」

「……」

すると男は、黙ったまま神と名乗る男の前に立つ。

「何かな？」

「…少し面貸せや」

「…えっ？」

今度は神がそんな言葉を発した。

「いいから面貸せつて言つてんだよ」

!!そして男は問答無用で神を引き摺っていった。

!!ま、待て!は、話せば分か…あ、ああああああああああ

!!!

!!そんな神の叫び声が、広い空間に木霊したのであった。

「んで、何で俺は死んだんだ？」

数分後戻ってきた男と神。男は地べたに座り、どこにあつたのか煙草を吸っていた。一方神は、無数のタンコブと顔面を殴られており、正座していた。

「ええとですね、実は貴方の書類を間違えてシユレッダーにかけてしまいました…」

「それが原因で死んだって訳か」

「その通りです。というより、先程と随分と喋り方や態度が変わってますが…」

「あつ？これが本来の俺だよ。普段からこんな話し方じゃ無理だろ。普通に考えりや分かるだろボケ！」

男は神に対してその様な話し方になっていた。

「フーツ…で、俺はこれからどうなんだよ？」

「えつとですね、お詫びとしまして新しい世界に転生して頂くことに…」

「転生なあ？」

男は顔を近づける。

「どの世界に行くんだよ」

「えつと…BLACK LAGOONの世界になります」

「あの世界か。漫画やアニメを見てたから知ってるぜ」

ニヤリと笑いながら、生前の時の読んでた漫画を思い出す。

「けどよ、あんな世界にそのまま放り出したりしねえよな？」

「も、勿論です！いくつかの特典を差し上げますです!!」

あまりにもビビりすぎてる神であった。

「特典は何でもいいのか？」

「多少の事なら…」

そう言われ、男は考え出す。暫くすると、考えが纏まったので言う。

「ならば、俺が生前で知ってる年寄りキャラの能力をくれ」

「と、年寄りキャラですか？何故??」

「だってよ、ト○○やワ○○ピー○なんかに出てくる年寄りキャラ、ほとんど強いじゃん。あれに憧れて、この歳でキセルで煙草吸ってたから

な♪」

無邪気な顔でそう言う。

「な、なるほど…分かりました。他には？」

「そうだな…いざって時に使える金が欲しいな。普段が働きながら稼ぐけど、馬鹿デカイ買い物したい時は流石にな」

「なるほど…分かりました。では、転生していただきます」

いよいよ転生する。

「貴方には、転生したらBLACK LAGOONの主人公の岡島緑郎になってますので」

「そうなのか？」

「はい。ですが、あくまでも憑依なので性格等は貴方のままです」

「ならいいわ」

「それでは…新しい人生に幸福を」

そして男は神によって転生したのであった。無事に転生というか憑依したので、生まれてから働くまでの事はカットさせてもらう。

「岡島君、明日からカンボジアに出張をお願いできるかな」

岡島「出張…ですか？藤原課長」

藤原「悪いけど頼むね。なにせ、我が社の一大プロジェクトだからね」

岡島「分かりました（面倒だなく）。上司は上司で、上の連中にペコペコしてよ。ま、さらに上の上司は上司で、何考えてるか分かんねえけどな」

そして、出張に備えて家に戻り準備するのであった。翌日、出発前にディスクを渡された。

岡島（ディスク…って事は、いよいよ原作突入ってところか）

そう思いながら、南シナ海を船で進んでいる。

岡島「にしても、いい天気だよな。こんな日に仕事なんてバカバカしいったらあらしねえ。それと…」

先程から後ろについてくる小型船に気づく。

岡島「あんなのが無きや、楽しい船旅だったんだがな」

そう思いながらも、必要最低限の荷物を持ち、後ろの連中が乗り込

むのを待っていた。そして乗り込みあつという間に制圧される。

岡島「こいつらもう少し抵抗しろよな。にしても、マジでゴツイな」  
サングラスをかけた男を見ながらそう思う岡島であった。

「おい、東京の旭重工からの積み荷はこれだけか？」

岡島「（ここは、大人しく答えておくか）そ、そうだよ！さつさと開放してくれ!!」

すると男は、岡島目掛けて殴りかかる。

岡島「遅いな…けど、喰らっておくか」

そして顔面に拳を喰らった。

「少し大人しくしなベイビー」

「ダッチめんどくせえ…膝の辺り撃ちまえ。小鳥みたいに喋りだす」

ダッチ「必要ねえ。報酬としちや、ディスク1枚で充分なんだ」

「ふん…報酬ねえ」

男と女、2人はそんな会話をしていた。すると、無線機になにか通信が入ったようだ。

「チツ…」

ダッチ「焦るなベニーボーイ。全て片付いてる…エンジン回しとけ」

そう言うと、ダッチはこう叫んだ。

ダッチ「OK！ジェントルマン!!俺達は退散する。あんたらは自由になる。ただし、俺達を追おうとするな。その場合、約束はチャラだ。あそこに見えるのは魚雷発射管だ。ポカチン喰らいたくなきや、後半時間は大人しくしとくのが懸命だ…それで、諸君らは自由になる」  
岡島（へく、海賊にしちや随分と優しいこつたな）

そう思っていると、女が銃口を突きつけてきた。

「おい、お前も一緒に来るんだよ」

銃口を突きつけられたまま、岡島は小型船に乗せられた。

岡島（やれやれ…）

顔は焦ってる表情をしているが、本心は女の行動に呆れていた。船が暫く進むとスピードがゆっくりになる。

ダッチ「レヴィお前な…こんなの攫ってきてどうすんだ？ええおい？」

レヴィ「分かってねえ…分かってねえよダッチ。考えてもみろよ！この仕事二万だぞ！たったの二万!!身代金でボーナス稼いで何が悪いってんだよ!!」

「そりゃ考え甘いよ」

岡島（金髪メガネに同意だ。課長はどうか俺を助けたいと思ってるだろうけど、景山部長やその上の連中が、俺なんかの為に身代金出すはずないだろ）

心の中でそんな風に思っている岡島であった……

レヴィ「殺されてえかベニー!!」

ベニー「別に…」

ダッチ「一体誰が日本と交渉するんだ？お前がか？相手の電話番号は？身代金受け渡ししの銀行口座は？」

そう言われ、だんだんレヴィの表情が怒りに染まっていく。

レヴィ「ああそうかい!!ぶっ殺して海人中叩きこみやいいんだろ!!!」

そう言いながら、レヴィは岡島目掛けて発砲する。

岡島「や、止める!!（バカかこの女！こんな狭い中で発砲すりや、跳ね返って仲間に当たる事を考えない単細胞なのかよ!!!）」

ダッチ「バカ！船壊すな!!」

レヴィ「うっせ〜!!」

そう言いながら、ダッチはレヴィを羽交い絞めして止める。

レヴィ「ダッチ…ダッチ分かった」

ダッチ「なにがだ？」

レヴィ「分かったから手え離せ」

ダッチ「OKレヴィ。クールにいこうぜ」

レヴィ「チッ！」

ダッチはゆっくりとレヴィを離す。

岡島「……」

ダッチ「オーライ、上に出て一服つけよう」



そして岡島とダッチは甲板に出て行った。

岡島「やれやれ：俺は一体どうなるのやら」

ダッチ「ま、何とかお宅の会社と連絡付けて引き取ってもらおうさ」  
岡島「そうなるかね…」

そう言いながら岡島は、持ってたキセルに火を点ける。

ダッチ「随分変わった物で吸うんだな」

岡島「まあな。昔からこれで吸ってるんだよ。お気に入りさ」  
ダッチ「フツ」

そしてダッチも、持ってた煙草を吸い始めた。

ダッチ「それと、こつちの都合で悪いが、ディスクを依頼人に渡すのを先にさせてもらう」

岡島「そう言えば、そんな事言ってたな」

ダッチ「俺達は単なる運び屋だよ。食うためにはたまに法に触れる事もやるが…それが家業さ」

岡島「なるほどねえ…」

そして互いに煙を吐く。

ダッチ「お前…名前は？」

岡島「岡島…岡島緑郎」

そんな他愛ない話をしてしていると夜になり、とある島に到着したのであつた。

ダッチ「行くぞロック」

ロック「ロックって…まあいいけどよ」

「そうなのかい？」

すると横から、金髪メガネの男が出てきた。

ベニー「さあ、行こう」

ロック「行くって何処へ？」

ベニー「酒を飲む所さ」

ロック「…やれやれ」

取り敢えず、ベニー達について行くのであつた。やって来た酒場の客は、日本ではまずお目にかかれない連中ばかりだった。

ロック「(どいつもこいつも柄悪い連中だな…)日本じゃ、まずこん

な酒場はないな」

ダツチ「だろうな。ここは元々南ベトナムの敗残兵が始めた店だが、逃亡兵を匿ったりしてゐる内に、気が付きや悪の吹き溜まりだ。フツカー<sup>婦</sup>、ジャンク<sup>中</sup>、マーシー<sup>兵</sup>、ジヨブキラー<sup>屋</sup>…どうしようもねえ無法者ばかりさ」

ロツク「みたいだな。じゃなきや、こんな連中が集まったりしないさ」

そう言いながら、ウイスキーを飲む。

ベニー「彼は変わり者なのさ」

ロツク「みたいだな」

レヴィ「なにかけた面して飲んでんだよ」

レヴィが2人の話割って入る。

レヴィ「折角酒を飲りに来てるんだ。もうちよつとクールな話をしようや?なあ日本人」

ロツク「これは?」

するとレヴィはニヤリと笑つて、酒を飲み干す。

レヴィ「ビールなんぞ<sup>小便</sup>ピスと一緒に。いくら飲つても酔えねえよ。男ならラムだろ?ま、女の勝負も受けられねえ玉なしなら、無理にとは言わねえけどよ。その時にヤスカート履いて、綺麗なりボン付けてダンスパーティーへ」

ロツク(随分と言つてくれるな。神のお陰で能力はついてるから酒も強い。そもそも俺は生前の時はアホみたいに飲んでたから自信あんだよ。レヴィに目に物見せてやるよ)

そして目の前に置かれたラムを一気飲みする。

ロツク「プハ…何か言つたか?」

レヴィ「こいつ…」

そしてロツクは先程のお返しと言わんばかりにニヤケ顔をする。

レヴィ「!!おいバーテンダー!」

「バカルデイ、店にあるだけ持つて来い!!」

2人の声が重なつたのであつた。そしてレヴィと飲み比べで、店内は盛り上がつていたのであつた。

## 第2話

ロックとレヴィの飲み比べが行われてる店内はかなりの盛り上がりを見せている。すると、入り口から武装を施した男達が入ってきた。

「イエア！楽しく飲んでるかクソ共？俺からの素敵なプレゼントだ！！受け取れ！」

すると男は手榴弾を店に放り投げた。

「M126A1かよ！！」

誰かがそんな事を言い放つ。そして爆発する。

「に、逃げろ〜！！」

「きゃあああああ！！！！」

店に叫び声が響き渡る。

「OK野郎共！パーティ・タイムだ！！逃げる奴にや尻の穴余計にこきえてやれ！！終わる時には酒場には死人しか残らねえ！！」

そんな事を言いながら、マシンガンを撃ち続ける。

ロック「おいおいマジかよ…」

取り敢えずロックは、カウンター裏に避難していた。

「レヴィ！テメエのダチが来たならテメエで応対しろ！！」

レヴィ「知らねえよ」

そんな呑気な会話をしていても、相手は撃つのを止めない。

レヴィ「おっ？装甲板変えたのか？」

「ファイファイー・キャリバーまでなら耐えられるぜ」

何故か嬉しそうに話すバーテンダーであった。

ダッチ「レヴィ！」

レヴィ「生きてるよ〜」

ダッチ「ベニー！」

ベニー「不思議と生きてるよ！」

ダッチ「ロックは？」

ロック「何とか無事だ」

ダッチが仲間の安否を確認する。

ダッチ「レヴィイ！二挺拳銃の名は伊達じゃねえってところ見せてやれ!!」

レヴィイ「フツ…」

するとレヴィイは、懐から拳銃を取り出す。それも2つだ。

「チエックしろ」

そしてようやく銃弾の嵐が止んだ。

「まだ声が聞こえた。俺は生きてる奴は大嫌いなんだ」

レヴィイ「…いい事言うぜ」

男の言葉に、レヴィイは小さく同意するのであった。そして次の瞬間、レヴィイはカウンターから飛び出して発砲する。

「ぶっ殺せ!!」

反撃するが、レヴィイの動きに追いつけず次々倒されていく。そしてすかさずダッチが援護する。

レヴィイ「ナイス援護だぜダッチ!!」

そして再びカウンター裏に戻ってくる。

「ここへ戻るなレヴィイ！迷惑だ！何回俺の店を壊した!!」

レヴィイ「んく…3回目か？」

「全部弁償しろよ。でなきや尻の穴溶接して、頭に代わりの尻の穴開けてやる!!」

レヴィイ「あいよ…ダッチ!!」

そう叫ぶと同時に、ダッチが援護射撃をするそれと同時に再びレヴィイも跳び出す。

ロツク「あいつ…笑ってやがるぜ」

笑いながら銃をぶっ放すレヴィイを見て、思わずそう呟くロツクだった。

ダッチ「悪いな、これじゃアンタの引き渡しはチャラだな」

ロツク「はっ？」

ダッチが言った言葉に、思わず素の返事をする。

ダッチ「元々ない話だしよ。ここで別れるってのはどう？」

その言葉に、等々ロツクは我慢できなくなったのだ。

ロツク「テメエ舐めてんのか？」

ダッチ「!？」

素早くダッチの側に来たので、流石のダッチも焦る。

ロック「あそこの奴が、無理矢理連れて来て挙句の果てに元々ない話だ？死にてえのか？おい？」

怒りもどんどんヒートアップしていくので、ロックの後ろに死神の姿が見えた。

ダッチ「いや…そのだな…」

ロック「んだよ？はつきり言えよこの黒ダコ!!」

ダッチの胸倉を掴む手が、どんと強くなり反対の手は支えてた壁に穴を空けていた。

ロック「男だつたら、俺の会社の連中と話すまでキチンと責任とれや！このポケナス!!」

ダッチ「オ、オーライ…分かったから、この手を離してくれ」

そう言われ、掴んでた手を離れた。

ロック「つたく…あのチャカ振り回してる女より利口と思ってたんだがな」

そう言いながら、キセルに火を点けて吸う。

ダッチ「あいつは特別だ。ところで…」

ロック「あつ？」

ダッチ「さつきと随分態度が違ってるんだが…」

ロック「こつちが素だよ。つたく、この性格は余程の事がない限り出さないつもりだったんだがな」

ダッチ「……」

その言葉に、ダッチは言葉を失った。

ロック「あの時殴った事は、今回の事でチャラにしてやるよ」

ダッチ「…感動で涙が出そうだけ」

ロック「後、この性格の事は黙っとけよ」

ダッチ「何故だ？」

そう質問すると、ロックは煙を吐きながら答えた。

ロック「説明が面倒だからだよ」

ダッチ「そ、そうか」

ロック「ああ。それに、普段の性格を出しときや色々楽しそう言いながら、吸い終わったキセルをしまう。

ダッチ「レヴィ！出るぞ!!」

レヴィ「あいよ！」

そして3人は裏口から外に出る。外に出たと同時に、ダッチが裏にいた連中を倒す。倒し終わると、いつの間にか外に出てたベニーが車を持ってきた。

ベニー「乗って!!」

レヴィ「戦争屋共喰らえ!!」

走り出したと同時に、追って来た連中にかっぱらった手榴弾を投げつけたレヴィであった。

レヴィ「ダッチ：バオの奴、スチームポットみたいに怒ってたよ。弁償しなきや、尻の穴溶接するって」

ダッチ「おつかねえ…泣いちゃいそうだ」

そんな話をしながら、乗って来た船に向かうのであった。波止場に到着し、急いで船を出す。目的地に向けて…

ダッチ「取り敢えず、今ところは追って来てねえみたいだな」

ロック「けど、あの連中がこのまま放っておくとは思えないけど」

レヴィ「だな」

ダッチ「ま〜いいさ。今の内に離れられるだけ離れるさ。レヴィ！するとダッチはレヴィに言う。

ダッチ「悪いが、ロックと一緒に念の為外で見張っててくれ」

レヴィ「あいよ」

ロック「俺は人質だぞ？」

ダッチ「外の空気でも吸っとけ」

ロック「……」

ダッチを少し睨み付けたが、諦めてレヴィと一緒に外に出て行った。

ダッチ「やれやれ…あいつは怒らせるべきじゃねえな。命がいくつあっても足りやしねえぜ」

そう言いながら、煙草を吸うのであった。外に出てる2人は、煙草

を吸いながら海を見てた。するとダッチから通信が入る。

ダッチ『ロツク、あんたの会社とつながった。ボスのカゲヤマさんだよ』

そしてロツクが付けてる無線機に繋がる。

ロツク「部長！岡島です!!申し訳ありません。ディスク紛失の件につきましては…」

景山『ああ、その件はもういいんだよ。そのディスクはもう存在しなくなった』

ロツク「…はっ?」

景山『事情が事情なので、特別に君には打ち明けるが他言は無用だ。岡島君、旭日重工五万人の為だ。南シナ海に散ってくれ』

その言葉を聞いて、ロツクの拳は次第に力が込められていった。

景山『ではな岡島君。係長二階級特進等悪いようにはしない』

そして通信は切れた。

ロツク「……」

グシヤリ

等々無線機のイヤホンは壊れた。

レヴィ「お、おい…」

流石のレヴィも、ロツクの行動に驚いていた。

ベニー『レヴィ、甲板か?』

すると、ベニーから連絡が入る。

レヴィ「ああ」

ベニー『海上を高速でこっちに来る奴がいる。しかし船じゃない、ずっと速い』

『そう言われ、周囲を確認するレヴィ。』

ベニー『三時五分の方、何が見える?』

すると、その方角から音が聞こえてき、その音は徐々に大きくなっ

てくる。そして、そこに現れたのは…

レヴィ「超低空侵入のガンシップだ!!」

ダッチ『クソツたれ! 戦闘ヘリだと!』

ロック「……」

その戦闘ヘリを見て、ロックはどんどん怒りが積もっていく。

ベニー『来るぞ: 後ろに食いついてきた』

ダッチ『やべえ、やべえやべえ!! こいつはやべえぞ!!!』

するとヘリはダッチ達目掛けて撃つてきた。

レヴィ「やべえのは分かってるよダッチ!!」

レヴィも銃で応戦する。しかし、当然ながら相手の方が速いので中々当たらない。すると暫くして、あいては船から離れてしまう。

ダッチ「なんかおかしくねえか? ベニー」

ベニー『ああ、おかしいよダッチ。全く撃つてこなくなった。連中は僕らを穴開きチーズにできるはずだ』

ダッチ「同感だ。何かがおかしい」

レヴィ「ダッチ」

外にいたレヴィとロックも戻って来た。

レヴィ「どうなってやがる? あいつらどこいった?」

ダッチ「ベニーボーイ」

ベニー『ああ、後方5000mまで下がって、ずっとそのままつけて来てるよ』

ベニーの話では、敵はそれだけ離れて船をつけている。

ベニー『何が狙いだ? 連中の: そう、何かだ』

するとダッチは海図を広げる。それを見て、渋い表情になる。

ダッチ「ちつくしよう: 水路か!」

ベニー『そう水路だ!!』

ダッチ「この先一帯は、バラワンの入り口まで岩礁とマングローブが続いてる。このまま進めば、狭くなる一方だ。しまいにや、回避運動もままらなくなる」

レヴィ「36径、逃げようぜ」

ダッチ「だな」



そして船はスピードを上げて逃げ始めるのであった。

### 第3話

戦闘ヘリから逃げていたロック達は、河口へと誘き寄せられてしまいついには行き止まりになっていた。

ロック「行き止まり!?!」

ダッチ「だな。もう前には道はない。ここで方向転換して戻るっきやねえ。だが、そこには奴が待ち受けている」

淡々と話し始めるダッチ。

ダッチ「俺の勘だと、奴等はリングを定めた。正面切った撃ち合いで決める気だ。さ、ゴングは誰がならせばいい?」

レヴィ「ふん」

ダッチ「時々いるんだ一瞬：誇大妄想というか、自分の事をガンマンだと思っちゃまってる連中が」

ロック「それで、どうするんだ?」

ロックはダッチに質問する。

レヴィ「ダッチ、燃料切れの線はどうよ?」

ダッチ「腐ってもE・Oの連中だ。そうなる前に片を付けに来るだろう」

レヴィ「：船の損傷は?」

ダッチ「今のところは大したことねえ。おつかねえのは：あいつだ」

ダッチはそう言いながら甲板に目をやる。

ダッチ「魚雷に一発でもくらっちゃったら、俺達月まで吹っ飛ぶぞ」  
レヴィ「あくあく：積みっぱなしにしとくからだよこのボケナス

!

ダッチ「ん、何かに使えると思ってたんだがな」

ベニー「勿体ないけど、この際投棄しちゃおうか」

ロック「……」

先程から何も話さないロックにダッチが話しかける。

ダッチ「おいロック」

ロック「：おいダッチ」

ダッチ「!?」

言葉遣いが代わり、ダッチは一瞬だが焦る。

ロック「その魚雷何発あるんだ？」

ダッチ「2発だ」

ロック「なら、その2発を甲板に出してくれ」

レヴィ「はあ!?!お前何言ってるんだ?マジで当たったら月まで吹っ飛ばぞ!!」

そう言うと、ロックはニヤリと口を吊り上げた。

ロック「さつきダッチが言ったろ?あの連中を月まで吹っ飛ばすんだよ」

レヴィ「だからどうやってだよ!」

ロック「ダッチ。アンタなら俺がどうするかもう理解してるだろ?」

ダッチ「お前…まさか」

ダッチはロックの考えが理解でき、頭を抱えていた。

ロック「そのまさかだダッチ」

ダッチ「正気沙汰じゃねえ…」

ロック「けど、他に方法はあるか?」

ダッチ「……」

その言葉に何も言えないダッチであった。

ダッチ「…分かったよ。どのみち他に方法はねえんだ!だったら、お前に懸けるぜロック!!」

ロック「そうこなきや」

こうして2人の間で、勝手に作戦が決まったのであった。

レヴィ「おいおい!お前らだけ分かってても意味ねえだろうがよ!!」  
当然レヴィも突っかかって来、ベニーにも一緒に作戦を説明したのであった。それを聞いた瞬間『バカかお前!?!』とか『普通に考えて無茶だ!』と言われていた。だが、結局はこの作戦で行くことになったのである。ラグーン号は、元来た水路を下っていく。その先には当然戦闘ヘリが待ち構えている。

ダッチ『ロック!やることは分かってんな!』

ロック「ああ！ミサイルが来たら、明後日の方向に信号銃を飛ばす！！」

ダッチ「その通りだ！さあ、アホが見えてきたぞ…レヴィ！チキンレースだ！乗せてやれ！！」

レヴィがヘリに向けて対戦車ライフルを撃つ。ヘリはそれによってロック達に近づいてくる。そしてミサイルを撃ち込んだできた。

レヴィ「ロック、来たぞ！赤外線フレアだ！！」

レヴィの合図で、ロックは明後日の方向に信号銃を撃つ。ミサイルはそれに反応し明後日の方向で爆発した。

レヴィ「よっしゃ！」

ロック「さて…それじゃ締めといくか！！」

ロックは甲板に下り、むき出しで置かれた魚雷の場所に行く。

ダッチ『来るぞロック！！』

ロック「ああ…」

そしてロックは、一本目の魚雷を持ち上げる。その光景を見た一同は言葉を失っていた。ダッチは別だが、レヴィとベニーは、ロックの話を信じてはいなかった。誰が聞いても、生身の連中が魚雷を一人で持ち上げる事などできないと思っていたのだから。

ロック「喰らい…やがれ〜！」

一本目の魚雷をヘリ目掛けて投げるロック。当然ヘリは途中までの工程を見ていた為、魚雷を難なく避ける。しかし避けた先には既に2本目が迫っていた。そして…

ドカ〜ン  
!!!!!!!!!!!!!!

魚雷は見事に命中し、ヘリを爆破したのであった。

ロツク「俺の馬鹿上司の言う事を聞いたことが運の尽きだな。おっと、元だったな」

肩をポキポキと鳴らしながら、満足そうな表情で言うロツクであった。

レヴィ「……」

ベニー「……」

一方、レヴィとベニーはその光景に何も言えなくなっていたのであった。

ダツチ「ま、気持ちにはわかるぜ……2人とも」

ダツチは、自分も通った道なので2人に同情していた。そしてロツク達はディスクの受け渡しポイントに到着したのである。そこには、顔に火傷を負った女性とガタイのいい男、そしてロツクの元上司である景山と藤原もいた。

「ご苦労様。スマートな仕事って素敵だわダツチ」

ダツチは、女性にディスクを渡す。

「それにしても、酷い格好よ貴方達？」

4人は、服装がクタクタになっていた。

ダツチ「ソーホー・シャクテリに行くわけじゃねえ。放っておいてくれ」

「そう。さて、Mr景山。我々ホテル・モスクワは仁義を守りますわ」

景山「おや？御社はブーゲン・ビリア貿易ではなかったのですかな？」

「我々是我々のやり方で筋を通しました。これで、遺恨はございませんわね？」

景山「……仕方のない事だ」

そう言いながら、女性からディスクを受け取った。

「次は、そちらがそちらの流儀で筋を通す番。細かい商談はホテルの方で」

景山「了解しました」

そう言うと、景山はロツクの方を見る。

景山「岡島君、ご苦労だったな。では、移動するぞ」

藤原「岡島君、なにしてる？ほら」

藤原は、ロツクに車に乗るように言う。ゆつくりと車に近づくロツク。

ロツク「えっと…すみません」

「なにかしら？」

ロツクは女性に話しかける。

ロツク「あの車は貴方達のですか？えっと…」

「バラライカよ。確かにあの車は私達のはあるわ。それがどうかしたの？」

ロツク「ええ。すみませんバラライカさん。この車廃車になってしまします」

バラライカ「えっ？」

そう言った瞬間、ロツクは乗り込む景山思いつき殴りつけた。車を凹ますくらいに。

景山「ごふあっ!!!？」

藤原「ひ、ひいいい!!」

ロツク「部長…あんたはあの時言ったよな？『南シナ海に散つてくれ』って。それが、生きててディスクが戻った瞬間に掌返ししやがって…たかがはした金とアンタの平穏を守りたいがために、簡単に部下を見殺しにする。だったら、今度は逆に俺があんたを殺したやろうか？ああ!!」

景山の首を片手で持ち上げ、徐々に力を込めていくロツク。すかさずバラライカは部下に止めるように指示する。

ロツク「邪魔すんな!!」

止めようとしたバラライカの部下を、反対の手で掴み海に投げる。流石のバラライカも、自分の部下が片手で海に投げられるとは思っていなかったようだ。

ロツク「これ以上やればアンタは死んじまう。だが、それだとバラ

ライカにも迷惑がかかる」

景山「ガハッ…ゴホッ…」

ロック「…俺の家族に、キチンと謝罪金を渡しておけ。額は…親が死ぬまでそこそこ楽できる程度と、妹には入学金と学費の全額支払いだ。それくらい、あんただったら簡単に出来るだろ？ ってかやれ」

景山「わ…わか…った」

そう聞いたロックは、景山を離す。

ロック「もしそれが出来てなかったら、俺が直々にアンタに制裁しに行くからな」

景山「……」

そう言い残して、レヴィ達の場所に戻る。

ロック「すみませんバラライカさん」

バラライカ「えっ？…ええ」

流石のバラライカも、先程の出来事に頭がついていっていなかった。

ロック「できれば、こいつがきちんとそれを行ったか、後日報告貰ってもいいですか？」

バラライカ「ええ。それくらいなら構わないわ」

ロック「お手数おかけします」

そしてバラライカ達は走って行ってしまった。

『……』

ロック「あれ？皆どうしたの？」

ダッチ「お前…自分が何したか分かってんのか？」

レヴィ「姉御に対して、よく普通に話す事が出来たな」

ベニー「ホントにね。普通、初対面で彼女を見たら大抵の連中はビビるけどね」

ロック「そうかな？別に普通に優しいと思うけど？」

『いや、初対面でそう思う事は変だ』

3人からそう言われるロックであった。

## 第4話

人質から、ダッチ達の仲間になったロックは、今日も海の上で仕事をしている。

ロック「あく、テストス：えく。セント・ジョーンズ号の皆様、おはようございます。えく、突然のお願いで誠に恐縮ではございますが、その：えく、なんと申しますか、停船をお願い致します」

ロックは今現在、巨大タンカーに向かってスピーカーでそう話している。

ロック「ええと、私の個人的な意見としましては、できるだけ速やかに：あの、指示に従った方が得策かと…」

ロックはそう言いながらチラツと横を見る。横手レヴィがロケランを笑顔で準備しているのだった：

ベニー『ダッチ、連絡だ』

ダッチ『なんて言ってる？』

ベニー『強制的に通過する』と』

ロック（だろうな。こんな小型船1隻如きに、巨大タンカーが止まるわけないわな）

ダッチ『オーライベニー。レヴィ！紳士の時間は終了だよ』

レヴィ「あいよ」

そしてダッチの合図に、レヴィはロケランをタンカーに撃ち込んだ。

ロック「あく、次の…」

レヴィ「貸せ」

レヴィはロックからスピーカーを奪う。

レヴィ「よく聞きやがれこのドテチン!!あたしの弾はモールスよりも足が速いぜエ!!【血塗れ幽霊船】になりたくなけりや、とつと船を止めやがれこのクソつたれ!!」

そして船は停止したのだった。いや、確かにロックの言い方では駄目なのは分かる。けど、あの言い方もどうかと思う。けど、ロック達の仕事はここで終わりだ。後は事務所に帰るだけだ。久々に道中は



何もなく、事務所に戻る事ができた。翌日、今日は仕事もなく今の所非番だ。ロツクは下町に出ている。

ロツク「さて、何かあるかな」

ロツクはブラブラと歩いてると、1軒の店で足が止まった。

ロツク「…何だ？何で俺はここで足が止まったんだ？」

気になりロツクは店に入る。店の中は剣や槍等が売られている。

「…ん？あんた、ラグーン商会の」

ロツク「ども」

ロツクもこの街で有名になっている。店内を見て回ると、1つの武器の前で止まった。

ロツク「これは？」

店主「こいつはな、今はこんなサイズだが…」

店主が横に振ると、物凄い大きな槍になる。ロツクの身長も余裕で超えている。

店主「とつとと。見ての通り、デカすぎて誰にも扱えねえ。コンパクトサイズになるから置いてるが、邪魔で仕方ねえ。名前はむら雲切？って言うらしい」

武器の名前を見ながらそう言う店主。ロツクは店主からそれを持たせてもらう。持った瞬間、ロツクの頭の中に前世での記憶が流れ込む。(この場合は、特典を貰っている為、武器を持っていたキャラの使い方が頭に流れ込む仕組みです)

ロツク「!!」

この武器に関する記憶が全て場がれ終わると、ロツクはその槍を自由自在に操る。

店主「…驚いたな。兄ちゃん、その武器の扱いをまるで知ってる感じだな」

ロツク「……」

店主「気に入った！武器はタダでくれてやる」

ロツク「…いいのか？」

店主「構わねえよ。置き場にも困ってたし、デカすぎて売れなかつたからな。こつちからすればゴミを処分できたと同じだ。気にすん

な」

ロツク「なら遠慮なく貰っていくよ」

ロツクは武器を手に入れ、店を出ていった。帰りにレヴィ達に土産を買っていった。事務所のドアを開けると、ダツチが目の前にいた。

ダツチ「レヴィ、ちよいと出てくる。頼んだぜ」

レヴィ「あいよ、氣イ付けて」

ダツチはロツクと入れ代わりで出ていった。

ロツク「レヴィ、ダツチはどこ出掛けたんだ？」

レヴィ「さあね。誰が非番オッん時に何してようが関係ねえ」

ロツク「いや、俺は。何気なく聞いただけさ」

レヴィ「詮索屋は嫌われるぜ」

そう言いながら、ロツクが買ってきた実を食べたレヴィ。

レヴィ「うえっ！プップツ！」

余程不味かったのか、食べた瞬間に吐いていた。

レヴィ「何だこりや！こんなモンにいくら払ったか知らねえけど、タダよりヒデエ買物だぜ。やられたなあ？」

余程不味かったようだ。

ロツク「そうか。下町へ下りたからって状況は変わらないって事か。ここの場合……」

レヴィ「オメエなあ。この街は国際級の悪党が角付合わせて、上から下まで騙し合って生きてんだぞ。テメエのメダケを信じられねえ奴にや、生きる資格も与えられねえ。ま、そんなモンで済んでる内は、花だがよ」

ロツク「肝に銘じておくよ」

ま、取り敢えず今は暇だし、レヴィも寝たしろも一眠りした。

レヴィ「起きな水兵！仕事だよ！」

ロック「んが？仕事？」

レヴィ「取り敢えず顔洗ってこい」

ロックはレヴィに言われた通り顔を洗い、今日買った武器を念の為に持っていく。こういう時コンパクトサイズは助かる。

ベニー「今日はどっちに？」

ダッチ「飛び入りだ。ドニー・イエンの口利きでな」

レヴィ「へっ」

ロック「ドニー・イエン？」

ダッチ「時々仕事をくれる。今回はフクオク島でベトナム軍から横領物資を受け取るだけの仕事だ。折角予定も空いてるしな。何にせよ労働は尊いものだぜ」

レヴィ「シケた仕事ばつかじやしようがねえよダッチ。そんなこつたから、こいつはいつまで経ってもクソツタレホワイト・カラーのスーツを脱げねえんだぜ」

ロック「そうポンポン叩くなよ。好きで着てるんだからさ」

レヴィ「思い出したぞロック。あたしがマーケットで買ってやったあのアロハ、あれどうした？」

ロック「あの悪趣味なアロハか！罰ゲームだ！あれ着て歩くのは」  
レヴィ「何だとロック！あたしの趣味が悪いつてか！」

ロック「小突くな！」

あんな趣味の悪いアロハ着るはずがない。まだベニーが着てるやつの方がマシだと思ったロックであった。